

	感じる・ 気付く力	うごく力	考える力	やいぬく力	人とかが わる力
20 どうしたの？大丈夫？？	●				●
21 どろんこにどっぷり浸かる	●			●	
22 なんか飛んできた ～自然とのかかわり～	●		●		●
23 カエル, まって!まって!	●	●			
24 うんてい はしっこまでやってみたい	●		●	●	
25 柚子の実 転がった!	●		●		
26 痛い?テープ貼ったら治るよ ～異年齢のかかわり～			●	●	●
27 砂遊びで カパッとできた	●		●	●	●
28 泣かしちゃったけどなんとかしたい					●
29 傘の中って楽しいな!	●				●
30 私の長靴!!			●	●	
31 ラッパができた!			●	●	

## どうしたの？大丈夫？？



## 【活動の様子】

入園して間もない4月のある日、登園してきたA児は、お母さんと離れた後寂しくてしばらく泣いている。少しすると、気持ちも落ち着き遊び始めたが、時折お母さんのことを思い出しては涙が出るという様子である。集まりの時間、クラスに集まって名前を呼んでいると、A児がまた泣き出している。すると、その様子を見ていたB児が、突然ままごとコーナーへ走り出す。

しばらくして、B児が何かを手に持ち、みんなの集まっているところへ戻ってくる。見ると、手におもちゃの体温計を持っている。

B児は、泣いているA児の脇に体温計を挟み、心配そうに覗き込み、「どこがしんどいの？大丈夫？」と声をかける。さっきまで大きな声で泣いていたA児は、B児が側に来て声をかけてくれたことで泣きやみ、気持ちが落ち着いたようである。

保育者がA児に、「良かったね。Bちゃんの優しい気持ちで涙が止まったね」と言うと、A児が「うん！」と頷く。B児はそのやりとりを嬉しそうに見ている。

今度はB児に、「Bちゃんの優しい気持ちのおかげで、Aちゃんは元気になったみたいよ」と声をかける。B児はにっこり笑って、自分の席へ戻って行く。

## 【遊びの中で育まれている力】

お母さんと離れて寂しくて、泣きたい気持ちも分かる。園で安心して生活が送れるようになるきっかけを考えてみよう。

- B児は、泣いている友だちに気が付き、「どうしたのかな？」「大丈夫かな？」と心配する。【感じる・気付く力】
- 何とかしたいと思い、自ら行動を起こす。【人とかかわる力】

クラスの集まりの時間だったので、席から離れてどこかへ行こうとするB児に「どうしたの？」と声をかけようとしたが、B児には何か思いがあるのだろうと考え、見守るようにした。

- B児は、これまでの自分の経験をもとに、友だちの心情や状況を推し量り、どうしたらよいか判断し、思い付いたことを行動に移す。
- A児の寂しい気持ちに自分の気持ちを重ねて共感し、寄り添う。【人かかわる力】
- 心配している気持ちを自分なりの言葉で表現し、思いを伝える。【人とかかわる力】

B児の優しい気持ちか、友だちの力になったことを言葉にして伝え、A児とB児双方の嬉しい気持ちに共感していく。

- A児は、B児に優しく関わってもらったことで、気持ちを立て直す。
- B児は、自分の関わりによって友だちが泣きやみ、気持ちが落ち着いたことを嬉しく思い、人の役に立つ喜びを味わう。【人とかかわる力】
- B児は、保育者の関わりによって、自分の行為を価値付けられ、自分の思いを相手に伝えることの大切さを感じる。【感じる・気付く力】

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【友だちへの温かい関心】

一人一人が大切にされていると実感できるクラス集団の中で、大好きな保育者との信頼関係を軸にしながら、日々、友だちと一緒に過ごす楽しさを積み重ねることを通して、泣いている友だちに気づき、心配するなど、友だちへの温かい関心が育まれている。

### 【子供の思いを共感的・肯定的に理解し、見守ろうとする保育者の姿勢】

部屋を出ていこうとするB児を、何か思いがあつてのことだろうと共感的・肯定的に理解し、制止しないで見守ったことで、B児はA児への思いを、言葉や行動で伝えることができた。A児が泣きやんだ場面でも、B児の行動を賞賛するのではなく、双方の優しい気持ちと嬉しい気持ちを、互いに気付いたり感じたり出来るように、2人の気持ちをつなごうとした。

### 【モデルとなる大人の存在】

他者を思いやる気持ちは、まず、自分が他者から思いやられるという体験から育まれる。優しい言葉をかけてもらう、困っていた時に手を差し延べてもらうなど、これまでに大人に優しくしてもらった経験が、B児の友だちへの関わり方のモデルとなっている。

### 【ごっこ遊びを楽しめる場や道具】

ごっこ遊びのできるコーナーを設け、子供が興味を持ちそうなもの、様々に見立てて遊べるようなもの、身近な家庭生活の再現ができそうなものなどを用意し、日常的にごっこ遊びを楽しんでいた。その中で、体温計を使い、友だちの体温を測ったり、お世話をしたりする遊びもあったのだろう。泣いている友だちを何とかしたいと思う場面で、その経験がパッとひらめき、この行動につながったのではないだろうか。

## 先生方へ…



保育者の重要な役割の一つは、心のつながりのある温かい集団を育てることです。集団の人数が何人であろうと、保育者が一人一人をかけがえのない存在として大切に思い、それぞれのよさを認め合って、保育者と子供、子供と子供の温かい心のつながりを作っていくことで、子供たちは互いを大切にすることを学んでいきます。保育者主導の一方的な保育の展開からは、互いの信頼感で結ばれた温かい集団づくりは難しいでしょう。一人

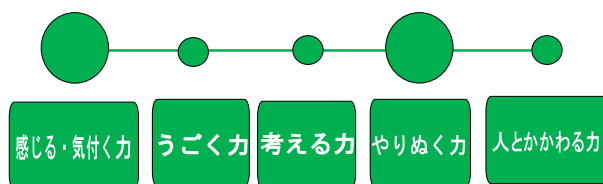
一人が認められ、その子らしさがのびやかに発揮され、相互に影響し合い、育ち合っていく温かい集団の在り方を考えることが大切です。

泣いている相手を慰め助けようとする行動などは、かなり幼いころから見られますが、これらは自己中心的な感情理解から生まれる行動であり、相手の立場に立った真の思いやりの気持ちは、他者と様々なやり取りをする中で、葛藤やつまずきを体験し、自分と他者の要求は異なることが分かるようになるにつれて育っていきます。保育者は、友だちとの感情的な行き違いや対立による様々な感情交流を通して、他者の感情や立場に気付くことができるよう、丁寧に支えていくことが大切です。

## 事例 21

## 3歳クラス (5月)

### どろんこにどっぴり浸かる



#### 【活動の様子】

3歳児の5月。A児は人や新しい場所への緊張感が強かった。少しずつ緊張を解きほぐすように関わることで、保育者と一緒に遊ぶことは好むようになっていたが、他の子供たちがどろんこ水遊びや泥遊びを活発にし始める中、裸足になることを嫌がり、泥を触ることも嫌がっていた。

この日、5、6人が裸足になり泥んこ池に足をつけて遊んでいる。A児はまず、靴を履いたまま砂場で遊んでいたが、時々泥の方を見る。保育者がA児に「裸足になってみようよ」と誘ってみると、A児は今までの緊張が嘘のように、すんなりと靴とズボンを脱ぐ。そして保育者と一緒に泥んこ池に入っていく。A児は始め、泥の感触を確かめるように、少しずつ泥につけた足を動かしていたが、保育者が「気持ちいい」と泥を自分の腕に擦りつけると、A児も感触を確かめるように、手を泥の中に入れていく。だんだんと姿勢が低くなり、次第に身体の全てを泥の中につけるようにしてその感触を味わっている。A児は、保育者がそばを離れても、ずっと泥の中で遊び続けている。

この日以降、A児は保育者がいなくても毎日泥に入り、泥だらけになって没頭して遊ぶようになっていった。それにつれて幼稚園に対する不安もなくなっていった。

#### 【遊びの中で育まれている力】

- 保育者との信頼関係、親しみの気持ちを築くことができている。
- A児は、裸足になることや泥を触ることが嫌だと感じている。【感じる・気付く力】
- 緊張感が和らぎ、周りの環境に対して心が動き始める。【感じる・気付く力】

最近のA児の積極さや、興味の示し方を見ていると、新しい世界を求めているのではないかと。今日誘ったら泥で遊ぶようになるのではないかと。

- 保育者と一緒なら安心して取り組める気持ちが育っている。
- 泥の感触を味わう。【感じる・気付く力】

もっと全身で泥の感触を味わってほしい。

- 全身で泥の感触を楽しむ。【感じる・気付く力】
- 感触を味わいながら没頭して遊ぶ楽しさを味わう。【感じる・気付く力】【やりぬく力】



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【保育者との信頼関係、親しみの気持ち】

A児は入園当初から不安が強く、自ら環境に関わっていくことが難しかった。そこで、保育者が一緒に遊んだり親しみの気持ちを示したりして、信頼関係を築いていった。そのことで、次第に、「A児は保育者と一緒だったら安心」、「一緒なら様々な事をやってみたい」という気持ちが育まれていた。

### 【保育者の子供理解を踏まえた対象と関わる機会の確保】

保育者は、「今日であれば泥に触れていくのでは」という見通しを持って、A児を泥に誘っている。そこには、今まで築いた信頼関係や、泥の様子を見ているA児の様子などにもとづく子供理解があった。A児のペースを大事にしつつ、対象との関わりを広げてほしいという保育者の願いがあり、そこにA児理解が伴うことで今回のA児の学びが生まれている。

### 【泥という素材に触れる環境の保障】

保育者がA児を泥に誘ったのは、泥が豊かな感触を伴いながら、子供たちを包み込む魅力を持ち、リアルに応答するという、子供にとって大変魅力的な素材であることを知っていたからである。そのため保育者は、魅力的な泥に触れられるよう、泥の状態や水の量を調整しながら、日々その環境を整えていた。そのことで、この日もA児が泥の魅力に触れることができ、結果として毎日没頭して遊び込むようになっていった。

## 先生方へ…



子供たちは、水遊びや泥遊びが好きで、よく没入して遊びます。面白そうという思いが生じてくると遊び始め、遊びに没入します。内発的動機によって生まれてくるフロー体験（時間を忘れて没頭すること）により、一つのことに夢中になって遊ぶのです。

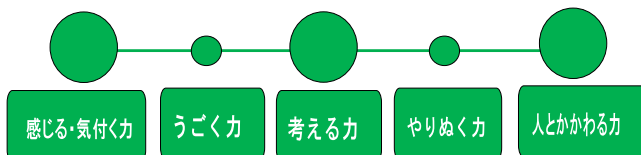
泥という素材は、遊んでいる子供たちからの働きかけに応答性があり、泥自体にも可塑性があります。それはとても魅力的なもので、子供たちを遊びに没入させていきます。保育者の「気持ちいい」という言葉に誘われるように、A児は泥に手を入れていきますが、次第に感触を楽しみながら泥遊びに引き込まれていく様子が伺えます。

保育者が遊びの環境として、いつでも遊べるように泥んこ池の用意をしていたことが、子供たちを遊びに没入させ、心の開放を促す絶好の環境構成だったようです。A児のように感触を楽しみながら存分に浸ることは、心からの安心感や安堵感、楽しさを味わうことにつながります。また、何より保育者がA児の気持ちを理解し、A児に対する願いや発達への見通しを持って関わったことが、A児が安心して能動的に動き出すことにつながったのでしょう。

## 事例 22

## 3歳クラス (6月)

### なんか飛んできた～自然とのかかわり～



#### 【活動の様子】

春の花が咲き終わった後のプランターに、カタバミが根付いていたので、種ができるころまで残しておくことにした。

子供たちの目に触れる場所に置いておくと、A児が興味を持ち、何気なくカタバミを触っている。すると、カタバミの実から小さな種が弾け出る。A児は「あれ？」という表情を見せ、もう一度ゆっくりと触っている。しかし、今度は種が弾けない。「さっきは何か飛んできたのに…」という表情で、A児が不思議そうにまた他の実を触っていると、また種が弾ける。



そばで様子を見ていた保育者は、A児が発見したカタバミの不思議な出来事に、「Aくん、なんかピョンと飛んできたね。面白いね。先生もこの草、面白いけえ大好きなんよ」と、声をかける。

するとA児は、自分の手に付いた種を見せてくる。「わあ！つぶつぶがいっぱい付いとるね」と言うと、A児は頷く。

「種が飛ぶのと飛ばないのがあったね」と、言葉をかけると、A児は保育者と一緒にカタバミの実をつまみ、「これはどうかな」、「これは大きくなってから、何か出てくるかも」と試しながら、プチプチと種が弾ける感覚を楽しむ。

何回か触っていると、A児は、「白いつぶつぶと茶色いつぶつぶがあるねえ」と色の違いに気付き、自分なりの発見を保育者に言葉で伝える。「ほんとじゃ、つぶつぶの色が違うね。面白いね。Aくん、よく気が付いたね」と応じると、嬉しそうに、また種を探して、弾ける様子を楽しんでいる。

#### 【遊びの中で育まれている力】

カタバミの種が飛び不思議に出会うかもしれない。残しておこう。

- 何気なく触ったカタバミから、不意に何か（種）が飛んで来たことに驚く。【感じる・気付く力】
- 不思議に思って、試してみようともう一度触ってみる。【考える力】

自分が子供の時にカタバミを見つけて触っていたことを思い出し、A児が不思議さを感じている様子に共感しながら、そばから見守ることにする。

- 種が飛ぶ実と飛ばない実があることに気付き、不思議に思って確かめる。【感じる・気付く力】【考える力】

A児が感じている不思議や面白さに共感し、カタバミとの関わりを一緒に楽しむ。

- 保育者に自分の手に付いた種を見せ、A児なりに思いを返そうとする。【人とかわる力】

A児の気付きや不思議に思ったことを、保育者が言葉にして表し、同じ場所で同じ気持ちになっていることを伝える。

- カタバミの実の膨らみや大きさに違いがあることが分かる。【考える力】
- 繰り返し試し、種が弾ける感覚や、種が飛ぶ様子を感ずる。【感じる・気付く力】
- 白いつぶつぶと茶色いつぶつぶがあることを見付け、自分の言葉にして伝える。【感じる・気付く力】【考える力】

面白いと感じたことを、繰り返し試し探究している。遊びに没頭するという事は、こういうことなのだろう。普段は言葉が少ないが、今日は生き生きと発見や驚きを言葉で表現している。

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【自然の不思議と出会う環境の構成】

子供たちにカタバミの種が飛ぶ面白さや不思議さに出会ってほしいと願い、プランターのカタバミを残し、子供たちの目の届くところに置いていた。この意図的な環境構成によって、A児がカタバミに興味を持ち、心を動かして生き生きと探究する中で、様々な発見や気づきをしていった。

### 【子供の感じている楽しさを共有・共感する保育者の存在】

子供が感じている面白さや発見・気づきに寄り添うことで、子供がカタバミとの関わりを深めていった。子供が夢中になっている姿を見守りながら、不思議に感じ、試してみようとする姿に寄り添っていくことが大切である。保育者が、言葉にならない表情や動作など、一人一人の思いの伝え方を温かく受け止めているので、その安心感の中で、子供自らの言葉による表現が生まれていた。

### 【発見や気づきを深める保育者の関わり】

保育者が子供の発見や気づきを認め、意味付けたり価値付けたりしたことによって、子供たちは、弾ける実と弾けない実があることや、実の膨らみや種の色に違いがあることなど、いろいろなことが分かってくる面白さを味わうことができた。

## 先生方へ…



子供が座り込み、何かをじっと見つめている姿が目にとまることがあります。子供たちは、些細なものにも心を動かし不思議を感じる柔軟な感性を持っています。保育者は、言葉をかける前に、まず子供のまなざしの先の小さな発見に共感し、一緒に感動し、「不思議だね、どうしてだろう?」と共に考えていきたいものです。保育者自身も自然を瑞々しく感じ取る感性を持ち、子供たちと一緒に自然を楽しむことが大切です。

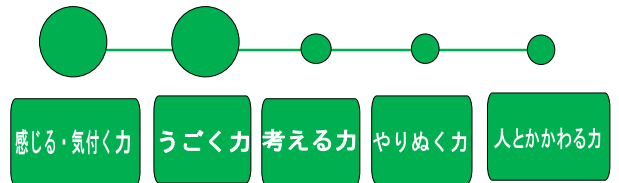
発見した自然の不思議さに共鳴してくれる相手がいると、嬉しくて、言葉で思いや発見を伝えたいくなります。気付いたこと感じたことを言葉で表現することによって、それらが自分の中でより確かなものになり、より多様な見方や感じ方へと開かれていきます。

自然は、子供の好奇心を揺り動かす魅力であふれています。自然と触れ合いながら、その面白さや不思議さを全身で感じ取ることができるように、園内の自然環境を整備し、地域の自然と触れ合う機会を作るなどして、子供たちが進んで自然と関わるようにしていきたいものです。

## 事例 23

## 3歳クラス (6月)

### カエル、まって！まって！



#### 【活動の様子】

ビオトープにカエル捕りに出かけた。A児が水際に入り、カエルまで手を伸ばす。みんなは固唾を呑んで橋の上から見守る。しかし、あとほんの少しというところで、カエルにすっと逃げられてしまう。

ビオトープの中は、石がゴツゴツしているし狭くて平地がないため、カエルを追いかけるのには適していない。そこで保育者は、カエルを捕まえた後、「おっとっと」とその付近の原っぱに逃げられたふりをしてカエルを離す。それを見てA児は猛然と近付いてきて、何とかカエルを捕まえようと必死で何度も手を伸ばす。しかし、カエルは跳ねながら、田んぼの中に逃げ込んでしまう。

子供たちが、再びビオトープで捕まえようとしたので、保育者が先ほどと同じように原っぱにカエルを逃がす。すると、先ほどはちょっと離れていたところから見ていたB児が、さっきのA児の様子を見ていたからか、「ぼくが捕まえる」と勢いよくカエルに向かっていく。

その勢いに押されたのか、A児たちもB児に任せたような格好になり、B児の後に続く。B児はカエルの動きに触発されたように、飛び跳ねるようにカエルを追いかけ、ジャンプに合わせるように素早く手を差し伸べる。それを繰り返し、3度目のアタックでカエルを見事に捕まえる。A児たちも大喜びする。

保育者が、「うわあ、すごい、どんなの？」と触ることで、みんながカエルに触れる状況ができる。「ヌルヌル」、「気持ちいい」などの声が聞こえてくる。そこで今度は、タライにカエルを入れてみると、「すごーい」、「泳ぐの速いねえ」と子供たちから歓声上がる。



#### 【遊びの中で育まれている力】

- 身近な小動物を捕まえたいという気持ちが大きくなっている。
- カエルの素早さを体感する。【感じる・気付く力】
- 友だちも同じ気持ちでその様子を見守る。

カエルに対して子供が注目し、興味を持っているので、もう少しカエルと直接関わる機会を保障したい。

- A児は、全身を使って捕まえようとするが、カエルの素早さや、なかなか捕まえられないことを実感する。【うごく力】【感じる・気付く力】

もう少しで捕まえられそうだったので、今日がその機会になってほしい。

- B児は、自分なら捕まえられると見通し、これまでの経験から来る自信を持つ。
- カエルのジャンプのすごさを感じる。【感じる・気付く力】
- B児は、カエルの動きに自分の動きを合わせる。【うごく力】
- B児はカエルの動きを予測する。
- B児は諦めずに、何度もカエルに向き合う。
- B児は実際に捕まえる達成感を味わう。
- カエルの感触を味わう。【感じる・気付く力】
- カエルの泳ぐ様子の面白さを感じる。【感じる・気付く力】

カエルの動きの面白さや感触を多くの子供たちに経験してほしい。





## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【興味のある生き物が身近にいて、それを捕まえることができる環境】

子供たちの身近なところにカエルという魅力のある生き物がいたことが、「捕まえたい」という意欲を生み出している。そして、カエルとの関わりを制限せずに、カエル捕りが自由にできる環境であったことが、今回の活動や経験を支えている。

### 【子供たちの発達に合わせた、対象との関わりが可能となる状況作り】

この事例で保育者は、死角や逃げ場の多いビオトープでカエルと関わることは、今の3歳児には難しいと考え、原っぱにカエルを離れた。そのことで、3歳児でも関わりやすい状況ができ、カエル捕りが可能となった。このように、保育者が子供たちの意欲や現在持っている能力を把握し、その上で、関わる事が可能な場面を作り、成功体験ができる状況を作り出したことで、実際にカエルを捕まえたり触れたりすることが可能になった。

### 【カエルの様々な性質に気付くことのできる場面作り】

この事例では、カエルを原っぱに出すことで、ジャンプの様子がよく見えるようになり、子供も同じようにジャンプをするという姿が見られた。また、カエルに触れることができる機会を作ったり、タライにカエルを入れてスーッと泳ぐカエルの様子を見ることができるようにした。このように、カエルを見たりカエルに触れたりすることのできる環境を整えたことで、カエルの多様な性質に気付くことができた。

## 先生方へ…



子供たちは、カエルという心を動かす対象に出会い、友だちと一緒にカエルの動きをまねし、何度も挑戦を繰り返しながら、カエルを捕まえる中で、カエルの跳び方や泳ぎ方など様々な動きに気付いています。

この経験から、子供たちは、他の小動物などにも関心を持ち、探して捕まえ、飼育し、観察するようになっていくでしょう。このような、生き物と触れ合う体験を通して、その素晴らしさや不思議さ、命の尊さが実感できるようになっていきます。

この事例では、カエルを捕まえながらカエルの動きを表現する喜びも味わっています。子供の素朴な表現遊びは、自分の思いがそのまま声や表情、体の動きになって表現されます。このように、3歳児は何かになりきって遊ぶことが大好きです。

今後、運動遊びの環境を整えることで、リズム遊びや飛ぶ遊びを楽しみながら、子供たちが全身で表現する喜びを味わうことができるのではないのでしょうか。また、絵本や図鑑などでさらに生き物への興味・関心を広げていくこともできるでしょう。



## うんてい はしっこまでやってみよう

## 【活動の様子】

年長・年中児が、うんていの上で四つん這いになり、端から端まで進んでは降りるという遊びをしている。子供たちは、うんていから降りる場所を自分で見つけては降りることを繰り返し、「やったー！」と喜び合っている。楽しく遊ぶ年長・年中児の様子を見て、思わずチャレンジする3歳児もいる。

3歳児のA児とB児は、遊びを食い入るように見ている。2人は活発ではあるが、うんていで遊ぶことはまだまだである。しばらく見ていたA児は、うんていに上がり、時折、年長・年中児の動きを見ながら、進み始める。A児は端のところまで行くと、降り方に困っている様子である。

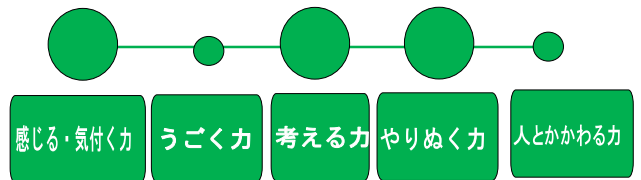
うんていから降りる方法は様々あり、うんていの端にあるはしごから降りる子供、棒状のところから降りる子供、そのまま飛び降りる子供と、それぞれ自分の力に合った降り方を、自分で決めて降りている。

A児は友だちの降りる様子を見て、体を方向転換すればはしごから降りられると気付く。降り方を決め、方向転換を無事終えたA児は、様子を見守っていた保育者と目を合わせ、満面の笑顔になる。

3回目の挑戦をしようとするA児に続き、B児がうんていの上に上がる。様子を見ていたB児は、うんていの上をスムーズに移動したが、降りる所で動きが止まり、どのようにして降りたらいいのか考えている。B児は、はしごで降りようとしたものの、体を方向転換することには気付かず、はしごに足をかけては戻すことを繰り返し、降りることをためらっている。手の力もまだ弱く、自分の体をうまく支えられず、B児は、半べそになっている。

B児は、助けてという表情で視線を向ける。保育者が、「大丈夫よ、よく見てごらん」と笑顔で言葉をかけると、小さく頷いたB児は、何度も降りることを試みる。何度か保育者に視線で助けを求めたが、その都度笑顔で「大丈夫よ、よく見てごらん」と繰り返す。

その時、B児の隣を3歳児のC児がぐるりと体を方向転換して降りていく。さっさと降りていくC児をあっけにとられて見送ったB児は、何度も自分なりに方向転換を試し、やっとの思いで降りることができる。見守っていた保育者に満面の笑顔を送ったB児は、再びうんていへと向かっていく。



## 【遊びの中で育まれている力】

- A児とB児は園庭に出る度に、うんていの周りにやってきて、用心深く友だちの様子を観察している。【感じる・気付く力】

今日は、A児とB児がいつになくうんていに関心を寄せているので、様子を見守ることにする。

- A児は、自分も登ってみたいという気持ちが芽生える。【感じる・気付く力】
- 自分もできると思った降り方が、できないことに気付く。【感じる・気付く力】
- 他の子供の降りる様子をよく見て、難しそうでも、やってみるとうまくいきそうなことに気づき、降り方を決める。【感じる・気付く力】【考える力】
- 自分でやり切った達成感を味わい、保育者と喜び合う。【やりぬく力】



- B児は、自分も登ってみたいという気持ちが芽生えている。【感じる・気付く力】
- 自分の力で進むことを楽しんでいる。【感じる・気付く力】
- 思い通りにいかないことに出会っている。【感じる・気付く力】【考える力】
- B児は、自分の力でやってみようとする。【やりぬく力】【考える力】

B児が自分で考え試してみようとしている。「自分を信じてやってみてごらん。いざとなったら先生が、守ってあげるよ」という思いで目を離さず見守ろう。

- 保育者の言葉から、見守ってもらっていることで安心している。
- すぐにはできないことに出会いながらも、C児の動きを見て、足をかけるところが違っていたことが分かり、工夫しながら繰り返しやっている。【考える力】【やりぬく力】

声をかけると危ないと思い「よく気が付いたね」と、心の中で応援しながら、降りるまで見守ろう。

- 自分でやり切った達成感を味わい、保育者と喜び合う。【やりぬく力】

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【子供が安心できる保育者の関わり】

A児やB児を常に見守り、A児が無事方向転換できた時や、B児が視線で助けを求めた時など、いつでも応じられるようにした。保育者と目を合わせて思いを伝えることや、言葉のやりとりをするといった関わりが、A児とB児が喜びを満喫したり試行錯誤したりすることにつながっていった。ありのままの自分が受け入れられているという安心感が、自分のやってみたいことに向かおうとする力となった。

### 【やってみたいと心が動くまで待ってもらえる時間の確保と自分の力を試すことのできる環境構成】

入園当初は、A児もB児も自分でやってみようと思わず、すぐに「やって」と言って保育者にしてもらおう姿がよく見られ、自分でできるかどうか自信を持つことができていなかった。心が動くまで待ち、ゆったりと見守ってくれる人の存在があることで、「自分でやってみよう」、「やってみるタイミングは、自分が決めていい」という気持ちが引き出され、自分で決め、やることのできたという成功体験になった。

今の自分が少し背伸びすれば達成できそうな環境が身近にあることや、時間がかかって自分でも自分でやることのできる時間が十分確保されることで、やってみようとする意欲が生まれた。

### 【異年齢の子供が共に遊ぶ空間】

異年齢の子供が楽しく遊ぶ姿に触れることが、子供の心を動かし、憧れの存在の動きを注意深く観察し、「自分もやってみたい」という気持ちを引き出していった。

## 先生方へ…



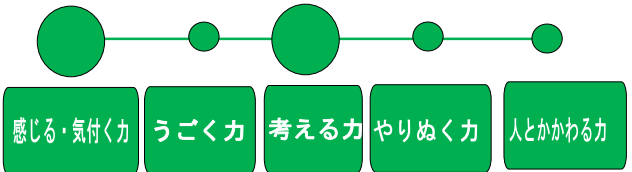
子供は好奇心のかたまりで、様々なことに興味を持ち、やってみようとし、そして、やることそのものを楽しみます。この事例では、そのような3歳児が、年中・年長児のするうんていに興味を持ち挑戦しています。

やってみようという意欲は、自分でやりたいという自律性、うまくなりたい・できたと感じたいという有能感、友だちとつながりたいという関係性、といった欲求が充足される時に、発揮されます。このような心の動きが、年中・年長児のする活動を見て、やりたいという気持ちを引き出したのではないのでしょうか。

またA児とB児は、保育者の温かいまなざしのもと、降りるためにはどのようにしたらよいのか思考を巡らせています。特にB児は何度も試みながら降り方を見付けていくことができました。達成できたことが大きな励みとなり再度試みることへの意欲につながったようです。



## 柚子の実 転がった！



## 【活動の様子】



数人の子供が、水の入ったタライから、スコップを使って樋に水を何回も流して遊び、水が流れていく様子を見ている。

A児が、水の入ったバケツと空のペットボトルを持ってやってくる。A児は、樋にペットボトルを置くと、バケツの水を樋に勢いよく流す。すごい勢いで水が流れ、ペットボトルも一緒に流れる。一瞬の出来事にびっくりした様子の子供たちだったが、繰り返しスコップで水を流す遊びを続ける。A児は、何度もバケツの水を汲みに行き、勢いよく水を流す遊びが気に入って、繰り返している。

A児の様子を見ていたB児は、少し考えた後、A児と同じようにバケツを取り、水道に水を汲み、樋に流し始める。

A児とB児のそばで見ていたC児は、ペットボトルを取りに行き、ペットボトルを樋に置き、スコップで水を流してみる。しかし、水量が少なくペットボトルは動かない。何度か試してみるが、動かないので諦める。

別のものはないかと花壇の方に探しに行くと、C児は、小さな柚子の実が木からたくさん落ちているを見付ける。

C児が柚子の実を樋に置き、スコップで水をかけると、柚子の実は、コロコロと転がりながら流れていく。C児は、「やったー！」と言って、何度も繰り返し、柚子の実を転がして遊び出す。見ていた他の子供たちも、柚子の実を拾い、同じように流して遊び始める。

## 【遊びの中で育まれている力】



- 水を流すことを繰り返し、水の動きをよく見る。【感じる・気付く力】
- その場にいた子供たちは、すごい勢いで水が流れていく様子に驚く。【感じる・気付く力】
- 子供たちもA児も、再び自分の遊びを楽しむ。

B児はA児の様子を見て、何かを考えているようなので、様子を見守ることにしよう。

- B児はA児の様子を見て、スコップとバケツでは、流す水量が違うことが分かり、バケツを取りに行く。【考える力】
- バケツに水を汲み、A児のようにやってみようとする。【考える力】

C児はA児のように、たくさんの水を勢いよく流さないと、流れないことには気付いていない様子。気付くまで、見守ることにしよう。

- C児は、ペットボトルをスコップの水で流してみるが、何度やっても流れないことに気付く。【感じる・気付く力】
- ペットボトルに代わる、別の流れそうなものを探そうとする。【考える力】

C児は、流すものを代えると流れるかもしれないことに気付いたようだ。新たなものを探しに行くC児の思考の妨げにならないように、見守ることにしよう。

- C児は、質量と重さの関係には気付いていないが、小さい柚子は軽いことを、感覚的に捉えている。【考える力】
- C児は柚子が流れたことを心から喜んでいる。

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【子供の興味に沿った環境構成】

水遊びが盛んになり、子供たちが、樋にものを置いて水を流すともものが流れるということに気付き、繰り返し楽しんでいる姿が見られた。また、水が流れることを楽しむ中で、水の量と流れるものの関係性に気付いている姿が見られた。保育者が、たくさんの樋や水を流すためのバケツなどを用意しておいたこと、また柚子の実が拾える環境があったことで、子供たちが気付いたことを実際に試してみることができた。

### 【じっくりと試行錯誤できる時間の確保】

保育者がすぐに手助けをしたり、方法を教えたりするのではなく、子供たち自身が、試しながら気付く喜びを体験できるよう見守り、試行錯誤することのできる時間をしっかりと確保することで、子供たちが遊び込むことができた。

### 【安心できる友だちの存在】

大好きな友だちが水を流しているのを見て、「自分もやってみたい！」という気持ちになり、試す姿が見られた。子供たちは友だちが試しているのを見て、それぞれが自分の遊びに取り入れている。言葉にはしなくても、目を合わせる、笑顔で伝えるなどの表情や共感し合うことのできる雰囲気の中で、見ていてくれる友だちの存在が、さらに工夫してみようとする姿につながった。

## 先生方へ…



子供たちは、日常生活での経験を通して、様々な事象に対する漠然とした概念や法則を獲得していくといわれています。

この事例では、樋にペットボトルを置き、水を流すことによってペットボトルが流れることを楽しむA児を見て、同じ体験をしたいとC児は試してみますが、うまくいきません。C児は、A児の流す勢いが強いことや水の量が多いことで、ペットボトルが流れていることに気付い

ていません。むしろ水ではなく、流れるものに着目して、ペットボトルに代わるものを探しに行きます。そして、見つけたのが柚子の実です。柚子の実を流してみると、面白いほどコロコロと流れることに気付き、それを楽しみます。流れるものと流し方や水の量の関係には気付いていないのですが、この遊びを繰り返す中で素朴な概念を身に付け、今後、物事や現象を理解する際の助けになると考えます。

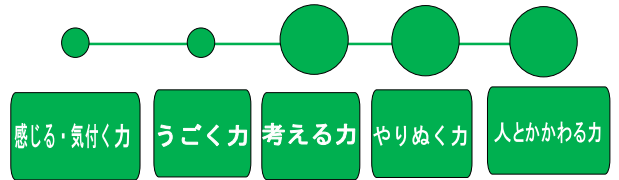
ここでは、保育者が温かく子供の思考を見守っています。この先、物事の関係性に気付くような援助を行うことで、子供の思考がさらに深まり、科学的な思考の芽生えにつながると考えられます。



## 事例 26

3歳クラス  
(6月)

痛い？テープ貼ったら治るよ  
～異年齢のかかわり～



### 【活動の様子】

延長保育の時間、A児（3歳11か月）は三輪車で遊んでいる。B児（2歳6か月）が転び、傷にはなっていなかったが、気持ちが落ち込んでいる。B児は保育者に抱かれ、一緒に友だちが遊ぶ様子を見ている。

A児が「Bちゃんどうしたん？」とやってきたので、保育者が膝を指差し「Bちゃんね、転んでここが痛いよ」と伝える。A児は、心配そうにB児の顔を覗き込んで、「痛かったん？大丈夫？」と声をかけたが、B児の表情は沈んだままである。

するとA児は「テープ買いに行ってくる」と三輪車にまたがる。セロハンテープのことだと思ったので、「テープ買って、何に使うの？何か貼るん？」と尋ねる。A児は「Bちゃんのここに貼るテープ、買ってくるんよ」とB児の膝を指差しながら答える。

A児が「ただいま。買ってきたよ」と絆創膏を差し出す仕草をする。「ありがとう。Bちゃん、Aくんが絆創膏買ってきてくれたよ」と伝える。

A児は、B児の膝に「ペタッ」と貼るまねをする。「Bちゃんよかったね。治った？」と聞くと「うん」と頷き、沈んでいた表情がパッと明るくなる。

B児の保護者が迎えに来ると、B児はすぐに「ここ」と膝を指差す。B児が笑顔だったので、A児がしてくれたことを伝えたいのではないかと思います。その時のことを保護者に伝える。

B児の保護者は「Aくんは優しいんですね」、「Bちゃん、痛いのが治ってよかったね」と、A児が我が子にやさしく関わってくれたことを喜んでいいる。A児の保護者にも伝えると「いつも大きい友だちに優しくしてもらっているからですね。嬉しいです」と喜んでいました。

### 【遊びの中で育まれている力】

いつも延長保育で元気に遊ぶB児の姿を見ているが、泣いていたので心配したのだと思い、転んだことを伝える。

- B児の転んで痛い、悲しいという気持ちに気付く。【人とかかわる力】

B児の膝に絆創膏を貼っていなかったため、テープを貼ったら治ると思ったようだ。A児の行動を見守ることにしよう。

- A児は、自分の経験と重ね、してもらって嬉しかったことを友だちにもしてあげる。【人とかかわる力】【考える力】

A児の行動を言葉にして伝えることで、B児にA児の優しさを知らせたい。

- A児の「つもり」とB児の「つもり」が一致し、B児が気持ちを立て直す。【やりぬく力】【人とかかわる力】

転んだことを伝えたいのか、A児にしてもらったことを伝えたいのか分からなかったが、B児の表情を見て、A児との関わりを伝えたいと思ったので、A児の思いを代弁していく。

子供同士の関わりの場面を、子供の育ちと重ねながら、保護者に伝えることで、我が子だけでなく、周りの子供に気持ちが向いてほしい。

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【ごっこ気分が広がり、つながる関係】

以前経験したことと、目の前の出来事が重なったことから、A児は「テープを貼ったら治るかも」と考えた。そのことが、泣いているB児の膝に買って来たテープを貼るまねをするという行動につながった。

### 【異年齢の子供同士の思いやりを支える保育者の援助】

A児の「大丈夫?」という言葉と、「テープ（絆創膏のつもり）」で貼る行動により、心配する気持ちがB児に伝わった。また、保育者がA児とB児双方の気持ちを汲み取り、伝えていくことが、B児の気持ちの切り替えにつながった。

### 【子供の育ちを感じられるような子育て支援】

保護者に子供の姿を伝えるとき、その状況だけでなく、保育者がどう感じたか、どこに成長を感じたかなど具体的に伝えていくことで、保育者が日々大切にしていることが伝わり、家庭での子育てに活かされていく。

先生方へ…



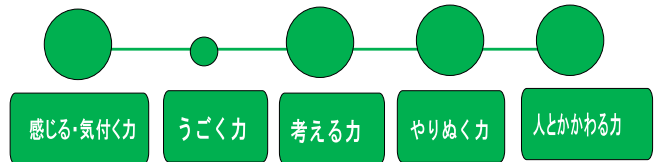
A児は、延長保育の時間、いつも遊んでいるB児が転んで泣いているのに気づき、心配しています。A児は、自分が転んだ時、優しく接してもらった経験と重ねながら、何とかB児に元気になってほしいと考えたのでしょう。「テープを貼ったら治るのではないか」ということを思い付き、三輪車に乗ってテープを買いに行き、貼ってあげるまねをしました。

これは、想像力が目覚ましく発達し、自分の経験したことと目の前の現実を結び付けて考えることのできるようになる、3歳児だからこそ出来た行動です。自己主張と他者受容がまだ未熟な時期ですが、相手が年下のB児だったからこそ、自分の力を発揮し役に立ちたいという思いが生まれ、このような関わりにつながったのです。

また保育者が、A児の行動を言葉で伝えていったことで、B児もA児のイメージした世界に入り込み、「治った!」と気持ちの切り替えができました。現実の世界では、気持ちの切り替えが難しい子供も、見立ての世界では落ち着くことができるのです。イメージを共有できる仲間関係は、今後、目標や価値を共有し活動を創造していくことのできる仲間関係へつながっていきます。



## 砂遊びで カパッとできた



## 【活動の様子】

3歳児が、砂のサラサラした手触り、水を含んだ時の感触や重み、水を多く入れた砂をかき回す手応えなどを、心地よく感じながら、じっくりと遊んでいる。

A児とB児は、砂をカップに擦り切り一杯まで入れ、御馳走に見立てて並べることを楽しんでいる。

周りで遊んでいる年上の友だちは、型抜きカップに砂を詰め、カップをひっくり返しながら、次々と型抜きを並べて遊んでいる。その様子に興味を持ち、A児とB児も見よう見まねでやり始める。

「面白そう」とか、「教えて」などの言葉を発することはなく、夢中になって、黙々と型抜きカップに砂を詰めてはひっくり返している。

しかし、なかなかうまくできない。砂の量が少なかったり、詰め方が弱かったりして、きれいに型抜きができない。砂の湿り気が足らず、ひっくり返すと型が崩れてしまう。手首を使って手早くひっくり返すこともできないため、砂がパラパラと落ちている。

失敗を繰り返しながら、何度も試行錯誤するうちに、砂をギュッギュッと押し込んだり、湿った砂を選んだり、水を足したりして、タイミングよくひっくり返して遊ぶ姿が見られるようになる。

やがて、思い通りの型抜きができ、「やったー！カパッとできたー！」と、満足そうである。



## 【遊びの中で育まれている力】

- 砂の感触の心地よさを感じる。【感じる・気付く力】
- 砂と水を混ぜることで、砂に変化があることが分かり、楽しむ。【感じる・気付く力】
- 御馳走に見立てることを楽しむ。【考える力】

- 次々に型抜きを並べていく様子を見て、「すごいなー」、「面白そうだな」と心を動かす。【感じる・気付く力】

異年齢との関わりを通して、興味関心が広がってほしい。

- 年上の友だちのやり方をよく見てまねながら、型抜きをやってみる。【考える力】【人とかかわる力】

集中して試している姿を見守ろう。

- うまくできないという失敗体験をする。
- 繰り返し試す面白さを感じ、何度も挑戦する。【やりぬく力】

しっかり砂を詰めておかないと、きれいな型抜きにならないことや、砂に湿り気がある方が良いことに気づき、A児B児なりに探究している。もう少し様子を見守ることにしよう。

- 試行錯誤する中で砂の適当な湿り気、砂を詰める量、器をひっくり返す時のコツなど、うまくできる条件を見付ける。【考える力】
- イメージ通りの型抜きができた達成感を味わう。【やりぬく力】

A児もB児も自分の力でやり遂げた満足感を感じている。思いが実現した喜びに保育者も共感し一緒に喜び、遊びが広がったり深まったりするよう援助していこう。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【砂場が安心して遊べる場】

発達にふさわしい砂場の環境が構成され、3歳児にとって、砂場が安心して遊べる場になっていた。それぞれが自分のやり方で気に入った遊びを満足いくまで繰り返し楽しみ、砂との関わりを深めている。

### 【自分なりに試行錯誤できる場や時間の確保】

型抜き遊びに夢中になり、根気強く試行錯誤を繰り返すことのできる場や時間の中で、失敗を踏まえながら、砂型がうまくできる条件やコツを学び取っている。

### 【試行錯誤を見守り、楽しさに共感する保育者の存在】

すぐに保育者が手伝ったり、遊びのヒントを教えたりするのではなく、子供たちが試している姿を見守り、思いが実現できるような環境を整え、時間を確保したことで、子供たちが遊び込み、様々な気付きが生まれた。また、子供が感じている面白さや不思議さに共感したり、思いが実現した時に一緒に喜んだりする保育者の援助によって、子供たちは、達成感や満足感を味わうことができた。

### 【異年齢交流を通しての刺激】

同じ場で遊んでいる年上の子供たちの遊びに魅かれて、自分もやってみたいと心を動かしている。異年齢の子供たちからの刺激があることによって、新たな目当てやチャレンジする気持ちが生まれている。

## 先生方へ…



砂は自由に形を変えることができ、自分のやり方で思い思いに扱って遊ぶことができる、優れた素材です。子供たちは、じっくりと感触を楽しみ、砂は水と混ぜると違う性質になることに気付き、それを生かして遊ぶようになります。

事例では、うまくいかない経験から、何度も試行錯誤し、子供たちは型抜きがうまくできる方法を見付け出していきました。やっと成功すると、嬉しくて満足するまで作り続け、より難しい型抜きに挑戦するようになりました。

子供たちは、心を動かされたことに対して、主体的に関わり始め、失敗しても諦めずにやり続けようとしています。一見すると、ただ同じことを繰り返すだけで、何も進歩していないように見えますが、内面では、新たな気付きや発見が生まれていたり、新たな技能を獲得したりと、変化が生じています。保育者は、ついやり方を教えて近道をさせたくくなりますが、子供が納得いくまで試したり確かめたりしながら対象と関わり、自分で真の学びを獲得していけるよう、余計な手出しをせず十分な時間を確保して見守ることが大切です。

## 泣かしちゃったけど何とかしたい

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかがわる力

## 【活動の様子】

A児は自分の思いを主張しすぎて優先する傾向が強いため、これまで度々友だちとの間でいざこざを起こしていた。

夏休み明け、マントを身に着けて遊ぶのが好きな子供たちは早速マントを着けて遊び始める。すると突然B児が泣き出す。A児が泣いているB児に近付き、心配そうに覗き込む。A児は泣いているB児に近付くものの何も言えず、B児の顔を何度も覗き込んだり、自分が責められるのではないかと不安そうに周りの様子を見たりしている。一方、B児はヒックヒックしながら時折思い出したかのように声を出して泣き、保育者が来てくれることを待っている様子である。



そこでB児の背中をさすりながら安心させ、「Aくん、どうしたの?」と聞く。すると悲壮な表情で「あのね、Bちゃんね、ぼくがぶつかったから泣いたんよ」と答える。それを聞いた保育者は「そっかあ。だからAくん、心配そうな顔をしているんだね」と言うとA児はコクンと頷く。今度はB児に「Aくん、そう言ってるけど、そうなの?」と聞くと「うん」と言う。「そっか。Aくんね、ぶつかったのちゃんと分かって、心配してくれてるよ」と言うと、A児も心配そうにB児を見る。しばらくしてA児が小さい声で「ごめんね」と言う。それを聞き、B児は「いいよ」と言う。保育者が2人の頭をぐちゃぐちゃとなでる。するとB児がニヤッと笑う。それを見てA児もニヤッと笑う。そしてまたマントをなびかせて遊び始める。

## 【遊びの中で育まれている力】

- 困った状況になったことを感じる。

A児との間で何かあったのだろうが、A児も知らんぷりをせずにそばにいたので、どうなるかもう少し見守ろう。

- A児は、何とかしたいとは思っているがどうすればよいかは分からず困っている。

まずいとは思っているが、どうしようかと困っているA児の思いを引き出し、お互いが向き合えるようにしたい。

- A児は、自分のしたことを認め、言葉にする。  
【人とかがわる力】

A児の精一杯の言葉を受け止めるとともに、B児にもA児の気持ちが伝わってほしい。

- A児は、保育者が気持ちを代弁してくれたことで、安心感を持ち、心からの謝罪を述べる。【人とかがわる力】

お互い気持ちを引きずるのでなく、楽しい肯定的な気持ちになってほしい。

- きちんと相手に向き合うことで、心が通じ合い、一緒に遊ぶ心地よさを味わう。【人とかがわる力】

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【子供の気持ちを受け止めつつ、気持ちが通うように橋渡しする保育者の存在】

保育者はこれまでもいざこざが起こったとき、単に形としての「ごめんね」という謝罪を求めず、気持ちを向き合わせることや相手の気持ちを感じられるように援助してきた。今回もA児がトラブルを引き起こしたことを予想していたが、A児がB児から離れずに見ていることをA児の成長と肯定的に捉え、A児の気持ちを受け止めつつ自分からの言葉が引き出せるように支え、お互いが向き合えるように援助した。単に謝るという形式を求めるのではなく、加害者側の気持ちも受け止めながら、その上で相手の気持ちに気付くことができるように支えたことが、相手と向き合う経験を支えている。

### 【葛藤を肯定的にとらえる保育者の存在】

いざこざが起こった時、時に保育者はすぐに解決させようとして、謝罪や仲直りをさせようとする。しかし、今回A児は、「泣かしちゃったけど、何とかしたい」という葛藤を十分に経験していることで、A児の側から仲直りしたいという願いが生まれてきていると思われる。葛藤場面を学びのチャンスとして大切に見守る保育者の目が、A児の成長を支えている。

## 先生方へ…



集団生活に慣れてくると、周りの友だちのことが見えてくるようになります。それまでA児が周りのことは気にせず強く自己主張し生じていたいざこざも、B児との関係では、泣いているB児の様子にふと気付き、B児を見ながらどのように寄り添ったらよいか葛藤し、不安や戸惑いを見せています。原因が「自分が当たったこと」にあることにも気付き、自覚しています。

この出来事には、A児の心の内を推し量り、肯定的に見守る保育者の存在が欠かせません。子供の行動を信頼して見守ってくれている保育者が代弁する温かい言葉に心を開きながら、A児は友だちとの関わりを学び、出来事はやがて解決へと向かっていきました。

3歳児では、相手の気持ちを考慮した動機にもとづいて、また5歳児になると、自分と相手の関係性を維持したいという動機にもとづいて、相手との関係性を調整するようになっていわれています。A児はB児の気持ちに気付き、自分をどう表現したらよいか学んでいるところなのです。子供たちは、このように他者の存在を感じ理解し、自己を相対化し自己抑制力を身に付け、他者と共存していくことを学びます。子供集団の中で様々な経験を通して、社会化されていくのです。また、遊びを通して様々な感情を抱き、葛藤したり、克服したりすることによって、子供の情緒は豊かになっていくのです。

## 傘の中って楽しいな！



## 【活動の様子】

A児は、製作や戦いごっこなど、遊びを見つけて室内で過ごしている。お弁当を食べ終わった後は、大好きな外遊びをしたい様子であったが、雨のため出られない。ちょっと残念そうな様子で外を見ている。

やがて、傘立てにある自分のお気に入りの傘を持って、「外に行ってくる」と言う。保育者は、「雨が降っているよ」と言ってみるが、「傘があるから大丈夫」と言って、元気に園庭に走り出る。

すると、傘をさして園庭で遊んでいるA児を見つけたクラスの子供たちも、次々に園庭に飛び出していく。最初は、それぞれが好きなように雨の中で遊んでいたが、雨に濡れている友だちに気付いたA児は、「傘と一緒に入ろう」と誘い、1つの傘に5人の子供が入る。

楽しそうな笑い声や、お喋りの声が雨の園庭から響いてくる。なんだか楽しそうだなとその様子を見ていると、保育者に気付いた5人が一瞬動きを止める。保育者が何も言わずに微笑んで見ていると、再び笑い声が戻り、遊びが再開される。

A児はみんなが濡れないように気を付けながら、傘を差している。A児が移動するとメンバーも一緒に動く。みんなで水溜りに入ってパシャパシャと音を楽しみながら一緒にはしゃいでいる。木の下を歩いていると、大粒の雫が落ちてくるので、大発見でもしたかのように声を立てて笑い合ったり笑顔を交わしたりしている。

傘の中の5人は、ぎゅっと小さくなって、身を寄せ合ったり肩を抱き合ったりして、しばらくの間、傘の中の遊びを楽しんでいる。



## 【遊びの中で育まれている力】

・雨が降っている様子や、いつもとは違う雨の日の園庭の様子に興味を持ち、じっと見入っている。【感じる・気付く力】

・傘をさして園庭に出ることを自分の意思で選択し、保育者に意思表示をしている。【人とかかわる力】

「雨が降っているけど大丈夫？」と声を掛けるが、A児は自分の思いや願いを貫き、園庭に出る。

・A児が見つけた遊びに周りの子が気付き、遊びが広がる。

・濡れている友だちに気付き、自分の傘に誘い入れる。【人とかかわる力】

・傘に5人で入る楽しさ・一体感が生まれている。【人とかかわる力】

・狭い傘の中で体を寄せ合い、お喋りしたり笑い合ったりして、楽しく情報を交換する。【人とかかわる力】

保育者が見ていることに気付き、一瞬身構えるが、温かいまなざしを感じたのだろう。安心して遊びを再開する。

・A児の動きを感じ、その動きや歩調に合わせて一緒に動きながら、つながり合う感覚を楽しむ。【感じる・気付く力】【人とかかわる力】

・友だちが雨に濡れないように気遣い、互いが肩を寄せ合ったり、ぎゅっと小さく体を寄せ合ったりする。【人とかかわる力】

・日常とは異なる雨の中で、雨音、水たまり、雫などの様子や自然事象について、感じたり気付いたりしたことを、友だちと共有する。【感じる・気付く力】【人とかかわる力】

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【温かく共感的な園風土】

雨の日に外に出ることを禁止してしまうのではなく、子供のやろうとしていることを制止せず、その思いを温かく見守り、大切に作る園風土の中で、子供は雨ならではの遊びを見付け、生き生きと活動し、「体を寄せ合い一体感を味わう」、「友だちを気遣う」、「雨の様子の違いを感じ共有する」など、たくさんの学びをしている。

### 【共感的・受容的保育者の存在】

保育者に見守られながら、子供たちは自由に自分でやりたい遊びを見付け、存分に楽しんでいる。子供の思いを大事にし、子供が感じている楽しさを共に感じようとする保育者のまなざしに支えられ、日頃から子供は安心して自分のやりたいことを楽しむことができているのであろう。その経験の積み重ねを通して、自己選択、自己判断、自己決定など子供たちの中に主体性がしっかりと育っている。自分で見付けた遊びを自分の意思で展開していく楽しさの中で、様々な学びが促され、さらなる主体性が育まれている。

### 【楽しさや嬉しさを共有・共感し合える友だちの存在】

単に友だちとうまく付き合うことだけを目指すのではなく、園・所で友だちと一緒に過ごす中で、嬉しい、楽しいなどのプラスの感情を共有し、温かい感情体験を積み重ねていけるように援助していくことが、人とかかわる力を育むベースとなっている。

### 先生方へ…



3歳児は狭い空間が大好きです。段ボール箱の中、机の下、積み木で囲った狭い基地などに入り込み身を寄せ合うことで、体が触れ合う楽しさや笑顔を交わす喜びなど、友だちとつながり合う気分が味わえることは、子供たちにとってとても心地のよい感覚なのでしょう。この事例の「傘に包まれた狭い空間」も、友だちとの一体感やつながる感覚を実感できる楽しい空間だったのではないのでしょうか。この体験が、友だちへの親しみや信頼を深め、人とかかわる力の土台となっていくのです。

この遊びは、大人の論理で考えると、つい見逃してしまいそうな、取るに足らない遊びに見えるかもしれませんが、しかし、当事者である子供にとっては、重要な意味を持つ遊びです。保育者は、子供が見付けた遊びの中の隠された学びを見つめ、共に楽しむ姿勢を持ちたいと思います。

また、「保育者に見られていることに気付き、子供たちが一瞬動きを止めた」とありますが、傘の中は、大人が入れない子供だけのワクワクとした秘密の世界だったのかもしれませんが。秘密は成長への欲求でもあり、特に大人に対して閉ざされる傾向にあります。子供だけの世界への余計な介入は避け、一度見守りたいものです。

## 私の長靴！！

## 【活動の様子】

雨上がり、園庭に出来た水溜りの中を、数人の子供たちが長靴でパシャパシャと歩いて楽しんでいる。楽しそうな様子に、興味を持ったA児は、自分も一緒に遊びたくなり、外へ出かけようとする。しかし、自分の長靴がないことに気付く。「長靴が欲しいー！」「家に取りに帰るー！」とA児はしばらく泣いている。保育者が「長靴が欲しい気持ちはよく分かるけど、今日は履いてきてないから裸足で行って見たらどう？」と声をかける。A児は納得できず、首を横に振る。

しばらくすると、A児は製作コーナーへ走っていき、空き箱を探す。箱を触ったり大きさや形を見たりしながら、考え込む。保育者が「もしかして、長靴を作ってみようとしているの？」と尋ねると、「ん！」と笑顔で応え、ティッシュの箱を選び取る。「作ってみようとするなんて、すごく素敵だねー」と声をかけると、早速ティッシュ箱に足を入れて履く。少し大きかったのか、歩くと脱げてしまうことに気付き、自分でテープを貼って脱げないように調整する。片足が完成すると、もう片方の箱を探す。製作コーナーにティッシュ箱がもうない。どうしようと困っている様子だったので、保育者が「他のクラスにも探しに行ってみる？」と言うと、片足に履いたまま、ティッシュ箱を探しに他のクラスに出かけていく。

しばらくして、ティッシュ箱を見つけたA児は、もう片方の足にも履き、脱げないようにテープで調整する。ようやく両足長靴が完成する。「Aちゃんの素敵な長靴ができたねー」と言うと、満面の笑みで「うん！」と答える。

「これでお外行ってくる！」と言うので、「気を付けて行っておいでー」と送り出す。A児は嬉しそうに小走りで出かけて行き、「すごいでしょ。見てー！」と、園庭を嬉しそうに歩き回り、友だちに自分の長靴を見せる。

しばらく歩き回っていたが、やがて水たまりに入ると「なんか冷たいー」と言う。水に濡れたティッシュ箱の長靴が壊れてしまったのだ。A児は、あれ？っと言うような表情を見せたが、自分の力で長靴を作ったことや、その長靴で遊んだ満足感を十分に味わったような表情でクラスに戻り、次の遊びを始める。

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

## 【遊びの中で育まれている力】

- 水溜りに興味を持ち、入って遊びたいという気持ちを持つ。
- どうしても長靴を履いて遊びたいという自分の思いを保育者に伝える。

- 3歳児なりにどうにかしたいという気持ちを持つ。

A児の自分なりに考えて形にしようとする気持ちに気が付き、しばらく見守ってみることにした。

- 作れるかもしれないという見通しを持つ。【考える力】
- 足の形や大きさを見て、自分の足に入るかなと予測し、確かめてみる。【考える力】【やりぬく力】
- 途中で諦めず、最後までやり遂げようとする。【やりぬく力】

A児が最後まで作り上げようとしている気持ちに寄り添い、素材のありそうな場所を一緒に探してみることにした。

- できたという達成感と、これからどうしようという期待感を持つ。

A児の表情から、自分の思いが形になった喜びを感じていると思い、共感している気持ちを伝える。

- 友だちに自分の思いを表現したり、言葉で伝えたりする。
- 自分なりに考えたことを形にして工夫して遊ぶ。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【友だちからの刺激】

長靴を履いて水溜りで遊んでいる友だちの楽しい様子から刺激を受け、一緒に遊びたいという強い願いを持ったことが、長靴を自分で作ろうとする意欲につながった。

### 【素材がいつでも自由に使える環境】

日々の保育の製作コーナーでの経験が生かされ、空き箱で長靴が作れるのではないかというひらめきや見通しを持つことが出来た。また、自分の足に合う箱の大きさや形の選択ができる様々な素材を準備したことも、この学びを支えた大きな要因である。

### 【子供の気持ちに寄り添う保育者の援助】

保育者がA児の気持ちに寄り添い、一緒に素材を探したり外に出かけることを見守ったりするなどの援助をしたことで、遊びが途切れることなく、A児は最後までやり遂げることができ、達成感、満足感を味わうことができた。

## 先生方へ…



どうしても水溜りに入って遊びたいという願いを実現するため、自分で空き箱を使って長靴を作る姿から、3歳児にして、自分の意思をしっかりと持ち、それを諦めずに貫く強い意志や、自分で考え自分で行動する力、問題解決力、自立心が育っていることが見えてきます。

園生活において、ルールや約束が細かく決められ、保育者に許可を得なければできないことが多いと、自分で考え自分の意思で行動する意欲や態度は育ちません。保育者の指示が多い生活では、指示待ちの姿勢を育ててしまい、自分のやりたいことが見付からなくなることにもなりかねません。自由感あふれる中で、日常的に自己判断し、自己選択し、自分のやりたいことを決め、それに向かって思う存分力を発揮し、自分の力でやりぬく充実感や達成感を味わう体験を積み重ねているからこそ、事例のような姿が引き出されたのです。

子供が自ら考え、自分でやろうとする気持ちに寄り添い、失敗を乗り越え、試行錯誤しながら自分の力でやりぬこうとするたくましい姿を、温かく見守っていきたいものです。



## ラッパができた！

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

## 【活動の様子】

園の行事をきっかけに、A児のクラスでは「もりのなかから」という絵本を題材にした劇遊びをすることとなる。保育者と一緒にストーリーを考えたり大道具を作ったりして楽しんでいる。

森の中から花嫁さんやお侍さん、お神輿を担いだ子供たちが出てくるというストーリーで、A児の役は、ラッパを吹きながら登場してくる豆腐屋さんである。

ちょうどその頃、2月の誕生会の時期で、職員による演奏会が行われる。ピアノ・ギター・フルート・パーカッション・トランペット等、さまざまな楽器が登場し、A児は大好きな先生が吹くトランペットに興味を持ち、聴き入っている。

ある日、A児が製作コーナーでいろいろな空き箱を手に取り、やがてクッキーの箱を見付け、何かを作り始める。まず、箱にヨーグルトの容器を3つテープで貼り付け、また空き箱を探している。明らかに作ろうとしているものの明確なイメージがあり、それに合う材料を選んでいることが伝わってくる。保育者が「何を作っているの？」と聞いても笑うだけで教えてくれない。

しばらくしてA児が、「できた！」と言い、演奏会で聴いたトランペットをまねラッパを見せてくれる。保育者が「何を作ったの？」と尋ねると嬉しそうに「豆腐屋さんのラッパ」と、教えてくれる。

保育者が「このラッパは、どこから音を出すの？」と尋ねると、長い間考え、また空き箱を探しに行き、箱の横に色の違うカップの容器を付ける。そうしてできた作品は、演奏会で聴いたトランペットそっくりである。その後、廊下でプップーというA児の声が響いている。



## 【遊びの中で育まれている力】

- 劇遊びに興味を持ち、ストーリーを考えたり、道具を作ったりする。
- ラッパを吹く豆腐屋さんに関心を持つ。

子供たちの興味や関心を大事にしながら、楽しい劇遊びを創り上げていきたい。少し自信のないA児が、自分らしさを発揮できるきっかけを作ろう。

- 職員による楽器演奏と出会い、心が動く。

これまでA児が製作している姿をあまり見たことがないので、何を作っているのだろうと見守ることにする。

- 自分の思いを実現したいと自分の意思で製作コーナーに行き、イメージ通りのものを作ろうとする。
- イメージに適した大きさや形の箱を選ぶ。【考える力】
- いろいろな形を組み合わせ、それらしい形になるよう工夫する。【考える力】
- 自分なりに納得のいくラッパが完成し、保育者にその喜びを伝えている。

- 保育者の問いかけを受け、音が出るところを作るという新たな目当てを持ち、よりそれらしいラッパになる様に、考えたり、工夫したりして粘り強く作り続ける。【考える力】【やりぬく力】
- 思い通りのラッパが完成し、達成感や成就感、考えたり工夫したりする楽しさを味わう。【やりぬく力】
- 出来上がった喜びを素直に表現する。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【心を動かされる魅力的な出来事との出会い】

大好きな保育者がトランペットを演奏する姿に心を動かされ、先生のようなラッパを作りたいという強い思いを持ったことが、この一連の活動のきっかけとなった。

### 【思いが実現できる製作コーナー】

製作コーナーを常設し、好きな時にいつでも自由に製作が楽しめるように、様々な素材・道具・場所を用意し、じっくりと納得いくまで考え、工夫できる時間を確保していることが、この学びを支えている。

### 【自分の意思で動き出すことを大事にして、見守る保育者の存在】

保育者は、子供の意思を尊重し、自ら主体的に動き出す姿や、じっくりと考えたり工夫したりする姿を見守っている。この温かい見守りに支えられ、子供たちは自分の力でやり遂げる楽しさや喜びを感じている。また、子供の気付きが深まるような保育者の適切な援助により、子供がさらに考えたり工夫したりする状況が生まれ、子供の学びが深まっている。

### 先生方へ…



A児は劇遊びの中で、自分がラッパを吹きながら登場する役であることは理解してはいたものの、劇遊びに対して漠然としたイメージしか描けていなかったと考えます。そんな時、保育者による演奏会で、大好きな保育者がトランペットを吹く姿に大きく心を動かされたことにより、自分も劇遊びの中で先生のようにかっこよくラッパを吹いてみたい、先生の吹いたものと同じようなラッパが作りたいという明確なイメージや目当てが生まれたのではないのでしょうか。この強い思いが、自らを製作コーナーへ向かわせ、思い描くイメージに適した材料を選択しながら、保育者が驚くほどの見事なラッパを黙々と作り上げたのではないかと思います。

保育者は、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、そのためには、体験からどのような興味や関心が子供の心に生じてきたのかを理解し、子供が追求できるよう環境を構成し、一つ一つの体験が相互に結び付き、園生活が充実するようになっていくことが大切です。

